国際社会学部―ロシア地域

ヨーロッパとアジアにまたがる動乱の地

「ロシア」とは国号であり、それが指す地理的な範囲はロシア帝国からソヴィエト連邦、そして現在のロシア連邦に至るまで、国家の盛衰とともに変化しました。その広大な地平には、今も 100 を超える民族と多種多様な言語・宗教が存在します。文学やクラシック音楽、バレエ、オペラなど、きわめて優れた文化がうみだされてきましたが、それは歴史上しばしば、多民族国家を統合するイデオロギーと絡み合うものでもありました。1991 年に社会主義体制が消滅した後、この地域を取り巻く国際関係は激変し、2022 年のウクライナ侵攻に至ります。今なお動乱の中心であるこの地域について、本専攻では歴史、経済、国制、文化など多様な側面から学び、現代情勢を自ら分析的に理解できるようになることを目指します。

ロシアの風景

19 世紀の画家イヴァン・シーシキンが描いた、白樺や松の群生するちょっと湿った森が、ロシア北部でよく見られる風景です。

でも、広大な領土の中には、ステップ草原、湖、黒土地帯、山脈、そして氷河と、実に様々な景観があります。

ロシアの都市と宗教

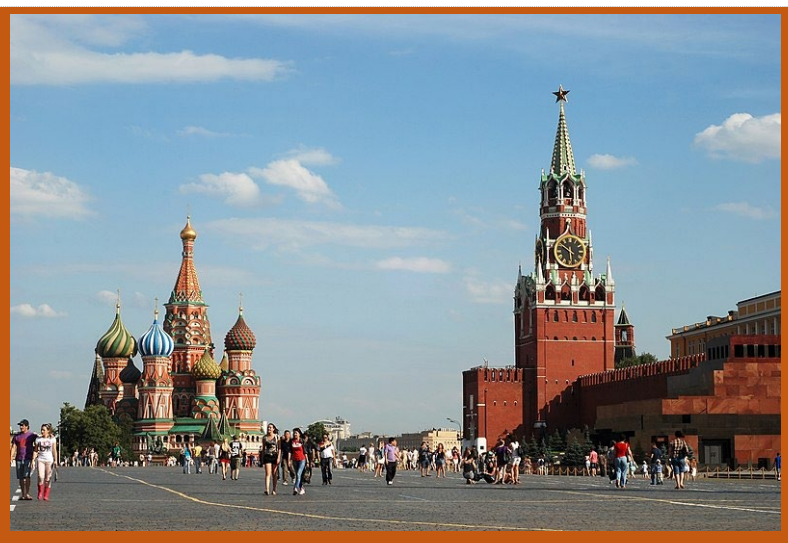
歴史的に多宗派国家だったことを反映して、現在もロシアの都市には多様な宗教の寺院があります。

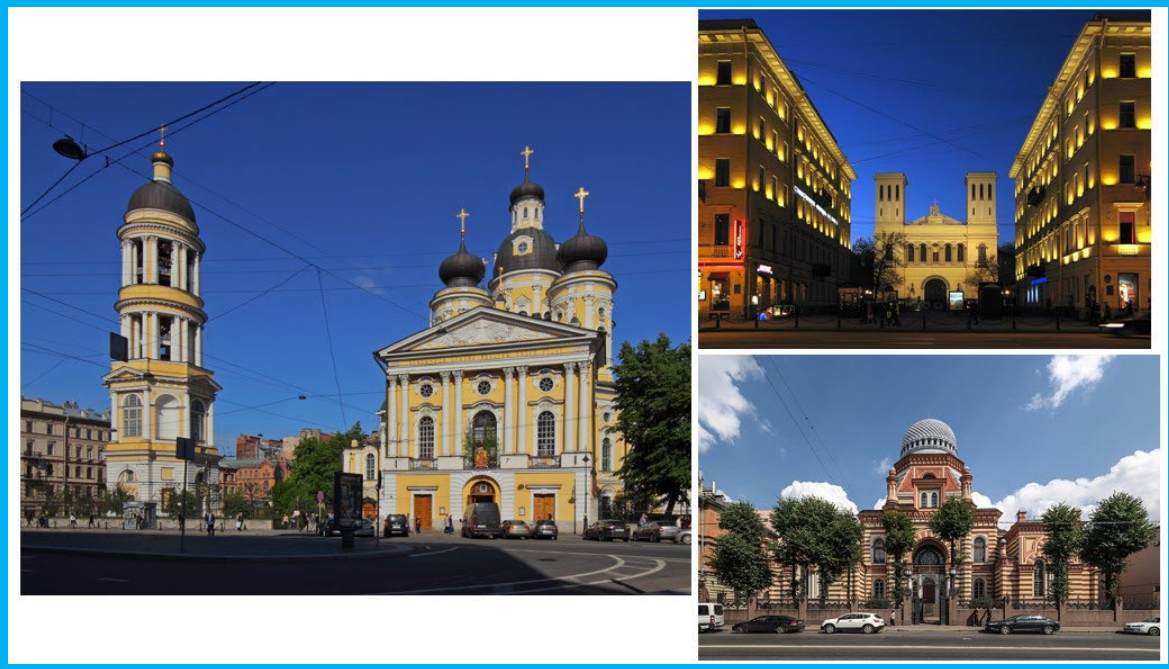
モスクワ

赤の広場に、クレムリンと向かい合って

ロシア正教の聖ワシーリー大聖堂があります

「40の40倍、教会がある」と言われた街でした





サンクトペテルブルク

「ヨーロッパへの窓」として開かれた

ロシア帝国の首都には

ロシア正教の寺院（左）だけでなく

ルター派教会（右上）や

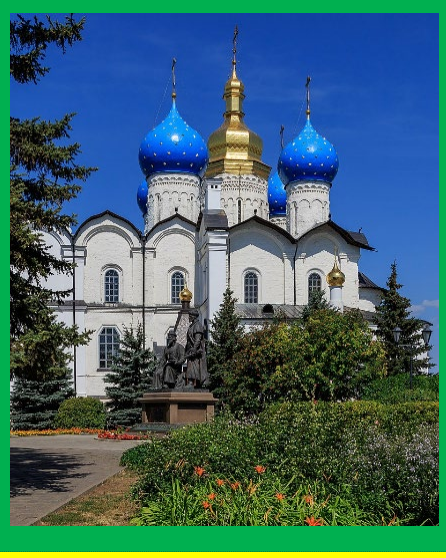
ユダヤ教のシナゴーグ（右下）も

カザン

イヴァン雷帝が征服したヴォルガ河畔のこの街は

イスラームを信仰するタタール人の都だったため

クレムリンの中にモスクとロシア正教会が並立します



エリスタ

この地に暮らすカルムィク人は

チベット仏教を信仰しており

仏教寺院があります

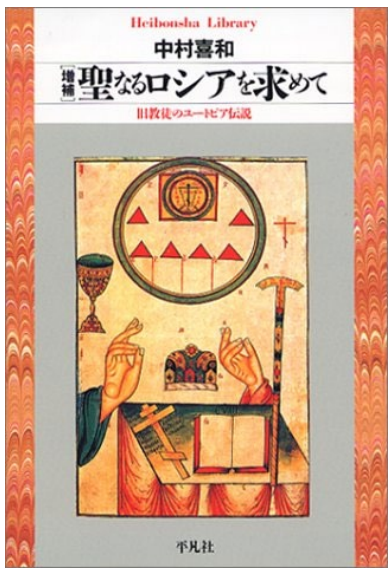
ロシアの人びと

歴史上、この国には、民族や階層においてきわめて多様な人びとが暮らしてきました。

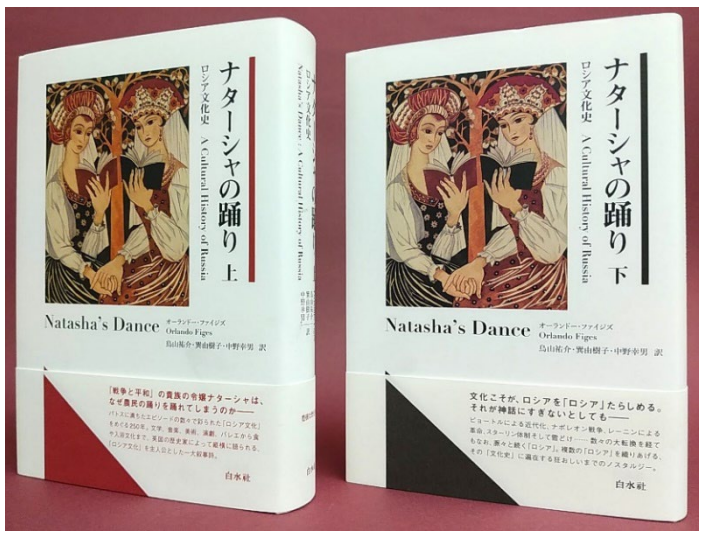
中世から現代まで、「ロシア」を知るためにおすすめの本

多様な宗教と民族を抱くこの国は、共生の知恵を培ってこなかったのでしょうか。あるいは、むしろそれゆえに、大国主義という考え方が生まれるのでしょうか。そんな関心を持った人には、まずは以下の本をおすすめします。私たちの専攻では、さらに理解を深める講義やゼミが待っています。

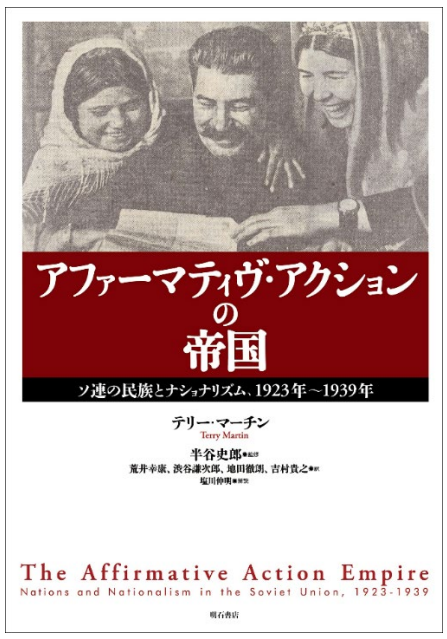
宮野裕
『「ロシア」は、いかにして生まれたか タタールのくびき』
NHK 出版、2023 年



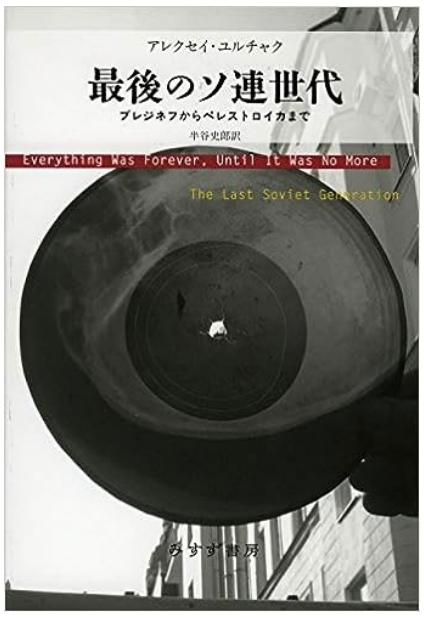
中村喜和
『聖なるロシアを求めて
—旧教徒のユートピア伝説』
平凡社ライブラリー、2003 年



オーランドー・ファイジズ
（鳥山祐介、巽 由樹子、中野幸男訳）
『ナターシャの踊り–ロシア文化史』（上・下）
白水社、2021 年



テリー・マーチン（半谷史郎監修）
『アファーマティヴ・アクションの帝国－ソ連の民族とナショナリズム 1923 年～1939 年』明石書店、2011 年



アレクセイ・ユルチャク（半谷史郎訳）
『最後のソ連世代—ブレジネフからペレストロイカまで』みすず書房、2017 年

松戸清裕・浅岡善治・池田嘉郎・宇山智彦・中嶋毅・松井康浩編
『ロシア革命とソ連の世紀』（全 5 巻）
岩波書店、2017 年

米原万里
『ロシアは今日も荒れ模様』
講談社文庫、2001 年

小泉悠
『「帝国」ロシアの地政学--「勢力圏」で読むユーラシア戦略』東京堂書店、2019 年

ピーター・ポマランツェフ（池田年穂訳）
『プーチンのユートピア—21 世紀ロシアとプロパガンダ』
慶應義塾大学出版会、2018 年